

『#関心領域 (The Zone of Interest)』(2023 年) を amazon prime video で視聴した。マーティン・エイミスの同名の小説が原作。ジョナサン・グレイザーが脚本・監督。第 76 回カンヌ国際映画祭で、グランプリを受賞した。

はじめはピクニックの場面。その後、映画は広々とした邸宅での女性や子供の日々が映し出される。洗濯物が翻る中、食べ物や衣類、化粧品が邸宅に運びこまれる。家の外では煙が棚引いている。なんと長閑なのであろう。

しかし、時は 1944 年、場所はポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所の隣(壁一枚を隔てた屋敷)である。所長 H が野原にこの新居を建てたということだ。花壇の草花の生育にも気を配っている。室内に目を向けると、所長夫人が持ち込まれた豪華な毛皮のコートを身に着け、物珍し気に香水や口紅を付けている。

少し歴史を学んだ者にはピンと来るはずだ。金(金歯)や宝石、服や毛皮のコートは強制収容されたユダヤ人から奪ったものだ。絶え間なく燻る煙はユダヤ人が焼却された結果である。それでも殺し足りないのだ。H 所長は技術者を招き、殺したユダヤ人を処分する効率的な焼却炉の建設に余念がなかった。

そんな暮らしに耐えられない者もいる。娘夫婦の屋敷を訪問し、贅沢な暮らしぶりに感心する母親だ。母親を掃除人として雇っていた裕福なユダヤ婦人もアウシュヴィッツに収容されているという。だが、母親は真夜中まで焼却炉の煙突から吹き出す炎や臭いに耐えられず、置き手紙を残して帰宅してしまった。

H 所長に転属の内示が伝達された。栄転だったが、妻は自慢の庭園に執着していて、妻は子育てを理由に屋敷に残ると言い張り、H は単身赴任を余儀なくされた。この女性には壁一つ隔てた隣でホロコーストが行われていることに思いがいたらないのだ。半年後、H はアウシュヴィッツの所長に復職が決まる。

最後に、挿入される現在のアウシュヴィッツの映像が流れる。早朝から展示施設の清掃が行われている。

この映画は何を告発しているのか。現在、ユダヤ人国家がガザで虐殺を行っている。ロシアがウクライナに戦争を仕掛けている。トランプはパレスチナ人を追い出し、ガザをリゾート地にすると誇らかに世界に向かって宣言している。私たちは、それを、テレビ画面を通じて平穏な日常の中で「関心」を持って眺めている。現在の私たちが過ごす現状は、1944 年のアウシュヴィッツ強制収容所の隣で「幸福」に暮らす女性とどこが違うのだろうか。残酷なシーンは出てこないのに、身の毛がよだつのである。

アウシュヴィッツ強制収容所は、ナチス・ドイツが第二次世界大戦中に国家を挙げて推進した人種差別によるホロコーストおよび強制労働により、最大級の犠牲者を出した強制収容所である。収容者の 90%がユダヤ人であった。周辺には副収容所が 50 箇所程度存在した。1979 年に負の世界遺産リストに登録された。

1940 年から 1945 年にかけてドイツが占領下においた現在のポーランド南部オシフィエンチム市郊外に作られた、強制的な収容が可能な施設群の総称である。

「アーリア人以外をドイツに入国させない」といった政策がドイツ国内の収容所の閉鎖を推し進め、ポーランドに大規模な強制収容所を建設する要因にもなった。

労働力確保の一方で、労働に適さない女性・子供・老人、さらには「劣等民族」を処分する「絶滅収容所」としての機能も併せ持つ。収容された者の出身国は 28 に及ぶ。ピーク時の 1943 年にはアウシュヴィッツ全体で 14 万人が収容されている。

併せて、劣悪な住環境や食糧事情、蔓延する伝染病、過酷懲罰や解放直前に数次にわたって行われた他の収容所への移送の結果、9 割以上が命を落としたとされる。生存者は、1945 年 1 月の第一強制収容所解放時に取り残されていた者と、解放間際に他の収容所に移送されるなどした者を合せても 50,000 人程度だったと言われている。

敗戦後は、ナチス親衛隊のみならず多くのドイツ企業が「人道に対する罪」を理由に連合国などによって裁かれた。